

中山道

山間を通り抜ける道

中山道は、江戸時代（1603 年～1868 年）に幕府の管理下にあった江戸と各地を結び道路網を形成していた 5 つの街道、五街道のひとつでした。この五街道の中でも最も重要だったのが、東の都、江戸と、西の都、京都を結ぶ中山道と東海道でした。東海道は、比較的平坦で、またその経路のほとんどが海岸線に沿っていたため、多様な地形を通る中山道よりも多くの旅人が利用していました。中山道とは、「山間を通る道路」という意味で、これは特に木曽谷を通る長さ 80km の区間にはあてはまっています。明治維新がこの地域にもたらした社会の大混乱を題材とした、島崎藤村の歴史小説『夜明け前』の有名な冒頭部分には、「木曽路はすべて山の中である」と書かれています。

中山道の経路は固定されておらず、洪水、地すべりや橋の崩落などに応じて定期的に山を上下していました。この道路の全長は約 530km で、道幅は平均 2.7m でしたが、曲がり角の多くは駕籠の棒が木々にぶつからないように拡幅されていました。路面は砂と土で舗装されており、米の年貢の代わりに労働力を提供していた地元の人々が、幹線道路から石や岩を除去する作業を担っていました。中山道は、馬車道として使われたことがなかったため、舗装されている部分はほとんどありません。